図書館の後には？

折田　洋晴（立教大学兼任講師）

『悲劇の死』（1961）や『バベルの後に』（1975）で有名な文芸批評家ジョージ･スタイナー（1929-　）に「書物の後には？」という文章がある。これはヴァージニア州ウィリアムズバーグの名門校ウィリアム・アンド・メアリー大学で 1970 年より開かれている Ferguson Seminar in Publishing という出版関係者の集まるセミナーの講演で読まれたもので、スタイナーの講演は 1972 年 3 月に行なわれた。筆者がその存在を知ったのは、実は最近のことである。1978 年に刊行されたスタイナーの *On difficulty and other essays* という本の邦訳が 2014 年に『むずかしさについて』という題で刊行されたが、その中にこの文章が入っており [1]、彼の他の文章と同様非常に難解なものであるが、筆者が日ごろ考えている問題に参考になるので、誤読しているかもしれないことを承知でそのことについて書いてみたい。

G.スタイナーの予感

「書物の後には？」というタイトルが示すように、今から 40 年以上前の 1972 年の段階で、スタイナーは書物の終焉が近いという予感を持っている。1972 年という年はアポロ 11 号の月面着陸から 3 年後で、米国で LC-MARC が頒布され始めたころであり、インターネットの基となった ARPANET という通信網が実験されていたころである。スタイナーはその少し前の 1970 年に ‘In a post-culture’ というエッセイを書評紙 *Times Literary Supplement* に寄稿し [2]、また 1971 年には、英国カンタベリーのケント大学で In bluebeard’s castle : some notes towards the re-definition of culture という講演 [3] を、さらに 1978 年には米国 Kidsmore College で The uncommon reader（普通でない読者）という講演 [4] をしているが、それらで語られているテーマはより広く文化の終焉を扱っている。さて、終焉とは何であるか。スタイナーはマルクスが資本主義の終焉を語ったような意味で使っているわけではない。新しいもの、あるいは、より良いものにとって代わられるということではなく、熱力学の言うように、エントロピーが不可避的に増大して、文化も最終的に均一な熱死の状態になるのではないか、我々は進歩しているのではなく、衰弱しているのではないかと感じとっているのである。以下では、彼がどんなことを語ったかについて略述してみよう [5]。

書物の歴史をみると、本が今の我々がすぐに思い浮かべるようなものとなったのは 16 世紀になってからで、また、読書行為が個人の自発的なものとなったのはやっと 18 世紀になってからのことである。そして、書物の黄金時代はモンテスキュー（1689-1755）の時代 [6] に始まり、マラルメ（1842-1898）の時代 [7] に終わった。その時代は、文明が書物を土台としており、余暇が尊重され、書斎というプライヴァシーと静けさに恵まれた時代であった。読書人は特定の社会的・道徳的秩序を保ち、教養を養うことで、伝統と創造を調和させることができた。しかし、そうした言語にまつわる環境がどんどん変化してきたのが現代である。

スタイナーは書斎のある家が少なくなってしまったこと、家の中が光と騒音に満ち、タブーの空間や聖なる時間がなくなってしまったこと、ペーパーバックや三文小説など廃棄を前提にしたものが多いこと、人はテレビ・ラジオに多く時間を使い、実際に本を読む人が少なくなっていることを嘆く。印刷文字は音声・視覚情報のキャプションになりさがってしまっている背後では、ダダイズムやウィトゲンシュタインらの言語への不信が芸術・思想の分野にはびこり、書物への根本的批判と言語の権威の低下をもたらした。少部数の良質な出版物が

減り､出版状況も自己破滅的になってきている。読書行為は「ながら読書」と「完全な読書」の二極に分かれるだろう。文字を読めても、真の意味の読書ができない人が増え、生半可な教養がはびこる一方で、専門家は細部にこだわるばかりとなり、真の読書を教える環境がなくなるだろう。スタイナーが重視しているのは偶然的・非計画的ではない礼儀のある読書であり、個人では一生読むことはないであろう多数の書物の生命を尊重することである。そして、書物を生きながらえさせるとは、書物との応答をすることである。しまいこんで使わない高価な楽器にどのような価値があるのかと問う。

確かに、コンピュータ技術はこうした言語の環境を大きく変えるであろうが、それがどうなるかは未だわからない[8)]。この環境変化の背後には科学技術という要因があったことは間違いなく、今後予想される遺伝子操作、人間の脳の電子化学的な操作、コンピュータが人間の脳を上回ること、宇宙開発などは我々の基本構造を全く変えてしまうだろう。その時代を生き生きと過ごすには、素人も少しは科学の言語、その基本の数学言語に親しむ必要があるし、それが抽象的すぎるのなら科学史に親しんでおくとよいだろう。しかしながら、環境問題など、科学技術にすべてをまかせるわけにはいかない問題が出現していることも明らかである。これまでの西洋文明はひたすら前進するものであるという考えは、もはや成り立たない。ではどうすればよいか。その対応は二つに分かれることだろう。ひとつは人間に必ず死があるように、文明の死をストイックに受け止めるフロイト流の考え方であり、もうひとつは、人間はこれまでも人間自体に無関心で、殺戮をくりかえしてきたのだと快活に割り切るニーチェ流の考え方である。そして、スタイナー自身はニーチェのほうを好むと言っているのであるが。

書物の進歩？

さて、ある人は進歩といい、ある人は破壊というこうした大きな変化は、革命という言葉を伴うトピックとされてきた。書物の世界では、例えば、産業革命、印刷革命、出版革命、情報革命、等々。そして、書物の終焉を語ったのは、なにもスタイナーが初めてではない。17 世紀にはシラノ・ド・ベルジュラック（1619-1655）が『月世界諸国諸帝国』（1657）というユートピア小説の中で、月世界での書物について書いている。それは紙も活字も使わない機械仕掛けの本で、ぜんまいを巻いてから、針を聞きたい章に合わせると、音が出てくる本である[9)]。文明の発達した月世界では 16 ～ 18 歳の青年が地球の老人よりも知識が豊富であることは何も驚きではない、彼らはいつでも本を読んでいる（聞いている）のだからなどと記されているが、現代のウェアラブル端末を思い起こさせる内容である。

それから百年たった 18 世紀の空想小説に L.-S. メルシエ（1740-1814）が著した『2440 年』（1771）という、目覚めたら西暦 2440 年のパリにいた男の話がある[10)]が、この中から本と関係する箇所を紹介してみよう。第 10 章「仮面の男」では、悪書を書いた作家は仮面をかぶるようになっていることが書かれている。悪書は事前の検閲で決まるのではなく、出版は誰でもできるが、それが悪書であるかどうかは公衆が決めるという。そして、その作家は、健全なモラル、万人のハートに語りかける普遍的な道徳に反する危険な諸原理を公表した償いに面をかぶっているのだ。第 28 章「王立図書館」には、700 年後のフランス王立図書館（現フランス国立図書館）が書かれている。そこは膨大な蔵書のある図書館ではなく、小さな 1 室だけの図書館であった。出来の悪い本、別の本のただの繰り返しの本は焼却し[11)]、良い本は小型にして再版したという。例えば、ヘロドトス、サフォー、アナクレオン、オウィディウス、ホラティウス、ペトロニウス、マールブランシュ、アルノーなどは燃やされていた。歴史書も相当が捨てられ、簡単な要約のみが作られた。昔（つまり 18 世紀）は、各人

がばらばらに重箱の隅をつつくような学問をしていたので、多くの本が作られたが、それでは確実な知識が確立されない。そこで、賞賛に値するものだけを残すことにしたという。この本の焼却、小型化は、現在行われている資料のマイクロ化・電子化、そして原本・原紙の廃棄を思わせる。また、第 29 章「新聞」には、大きなサイズの『公私新報』が刊行され、世界中の様子が伝えられている様子が記されている。例えば、日本の首都江戸発の記事として、日本では鎖国が終わり、誰もが外国の学芸を熱心に利用している。この国ではもう自殺は美徳ではなくなったと書かれているという。メルシエは冒頭で、この未来の時代を人間が勇気と、自由と、独立と、美徳を回復した時代であるとしている。

さらに百年後の 1894 年にはまさに書物の終焉をタイトルとした小説が書かれた。文筆家で愛書家でもある Octave Uzanne（1851-1931）はアメリカの雑誌 *Scribner's magazine* v.16, issue 2（Aug.1894）に‘The end of books’という小説を載せたのである [12]。この小説は 2004 年にオーストラリアのアデレード大学が電子ブック化して、ネットで読めるようになっている。筆者は end of books、future of the book、after the book などの言葉でネットを検索している時に、この小説を見つけた。さて、その内容であるが、19 世紀末のロンドンを舞台としており、王立協会の金曜会で後のケルヴィン卿ウィリアム・トムソン（1824-1907）が行なった 1,000 万年後に地球は終りを迎えるという講演 [13] を聞いてショックを受けた 8 人の面々が、その帰りに夕食をともにし、人類の将来を論じる話である。新大陸に文明の中心が移った後、衰退に転じるだろうという話題や、将来、人は人口栄養を摂るようになり、レストランも食料品店もいらなくなるだろうという話題などが出た後、愛書家である主人公に百年後に本はどうなるだろうという質問がなされ、彼はやがて本は蓄音術（phonography）にとってかわられるだろうという話をしたのである。1877 年にエジソンの発明した蓄音術は未熟な段階で、1887 年に E. ベルニーナが発明した円盤式の gramophone も当時はまだ性能は低かったが、彼によれは、近い将来には筒状のものに蓄音され、作者が自分で吹き込んで、発売するようになるので、作家はナレーターと呼ばれるようになるであろう。また､剽窃を防ぐため著作権を登録する。図書館は蓄音館に変わり、過去の作品は誰が朗読しているかで選り好みされるようになるし、愛書家は蓄音筒を美しく装幀するようになる。朗読には音響効果も入っているし､方言での朗読も聞けるようになる。朗読の下手な作者は上手な俳優を雇うようになるだろう。町のあちこちに、音の聞ける自動図書館があり、蓄音筒も売られている。もっと売りたい作者は、中世の吟遊詩人のように売り歩き、安く聞きたい人たちは集まって共同で聞いている。ニュースを知らせる雑誌も音になり、エジソンの発明したキネトグラフも発達していて、映像を壁に写しながら音を聞くようになるだろう。そして結びに、人々は毎日くだらないことばかり聞くようになるだろうとも書かれている。

何のことはない、これらはその後実際にラジオ、テレビ、ウォークマン等々で実現したことではないかと思われるだろう。何度かの万国博覧会を経験した 19 世紀末には、未来には科学技術が一層発達することが当然と受け止められ、それが人類の進歩であるという価値観が定着していたのである。明治の日本が西洋文明に追いつこうとしたのもこの価値観を共有したからであった。本のディジタル化、電子本の刊行などは、この流れから自然に到達した段階といえるであろうが、この進歩への懐疑を表明しているのが冒頭のスタイナーであり、背景には科学技術への懐疑があるのである。以下では、この観点からの議論について書いてみよう。

社会学者が言うには

情報技術の進展への違和感は、これまでにさまざまな視点から表明されている。ここではイタリアの社会学者 Franco Ferrarotti（1926-　）の発言をみてみよう。1988 年の著書 *La storia e il quotidiano*（歴史と日常生活）[14] の第 1 章「さえぎられた会話」は「我々は日常生活を失い、もはや歴史を持たない」という一文から始まる。現代人は、すべての人の日常生活をすべて歴史にしようとしたため、かえって両方を失ったというのである。すべての人を歴史化するかのようにメディアが浸透してきたが、その膨大な断片的な情報・イメージの洪水の中で、人々はストーリーを語る技術を失い、会話を失った。こうした日常生活の変化こそがスタイナーを嘆かせていた正体ではないだろうか。F. フェラロッティはたいへんな読書家で、1998 年には *Leggere, leggersi* [15]（読むこと、読まれかた）という読書論を書いている。第 1 章は「書物：死期と変容」と題され、本を葬ろうとするマクルーハンのメディア論について、人がホモ・サピエンス（知恵のある人）からホモ・センティエンス（瞬間に生きる人）あるいはホモ・ポスト・ヒストリクス（歴史を失った人）になったと嘆く。書物は深く根を張っていて、地下から複雑に絡まった歴史的価値を送り届けてくれるものであるが、一方、テレビは歴史を消すものである。マクルーハンは人間を拡張するものとしてのメディアを賞賛したが、フェラロッティは体の機能を補完する器具への不信があるようで、それらをコミュニケーション固有の天性とは異質なものとみている。別の章では、彼にとって読書とは麻薬のようなもので、必ずすべてをむさぼるように読むという。自分は読まれる前の文章を吸い込んでいるサイフォンのようなもので、文章の中身を予感し、直観的に見抜いている。喉を横断している心で読み、理性と幻覚の間の軽い酔いの状態で読書するとも書いている。

彼は同じ年に *Libri, lettori, società*（書物、読者、社会）という本 [16] も出版しており、大衆社会の中で機械文明的な言説が優勢となり、言葉の世界が混沌としていること、その中で書物はゆっくりした反省を誘う重要なメディアであることなどを述べている。読書意義の危機を扱った章では、出版点数は増えるが読者数が減るなかで、読書の意義はとどまることなく縮小しつつあり、生活習慣としての読書がなくなっているとして、スタイナーが近づきつつある「完全な」読書の死亡告示に身をこがす憂鬱にひたっていることも記している。

しかし、現実には人々が紙媒体の図書・雑誌・新聞からディジタル・メディアへ移行していることは事実であり、2014 年に英国の The Economist 誌が e-book としてネットで公開した *From papyrus to pixels; the digital transformation has only just begun* 中の数字をみると、米国の図書の売上額で e-book が紙の本を上回るのは 2018 年のことで、英国も同年であるが、同じ年に日本では e-book は全体の 19%、イタリアで 13%、ドイツで 11%、中国で 8% にとどまるだろうという予測が出ている。しかし、その先では世界中で e-book が主流になるだろうというのがおおかたの予測であろう。こうした、本のディジタル化の進行について書物史家はどう考えているのか、以下ではそれをみてみよう。

書物史家の見解

アメリカの歴史家で主に書物史を研究している人に『猫の大虐殺』（1984）[17] で有名なロバート・ダーントン（1939-　）と『テクストの擁護者たち』（1991）[18] で知られるアンソニー・グラフトン（1950-　）がいる。ダーントンは Gutenberg-e という歴史の研究書をインターネット上で出版するプロジェクトの発案者として知られ [19]、ハーヴァード大学の Digital Access to Scholarship at Harvard というオープン・アクセス・サイトへの尽力など電子化を積極的に支持しているように見えるが、歴史の専門家であるから、情報技術

の進展を手放しに喜んでいるわけではない。書評紙 *The New York review of books* に掲載した‘The library in the new age’という文章[20]で、テクストの異同やその伝播経路を重視する書誌学のような観点のない Google Books だけを頼りにした研究では、いかに多くのことを見落としてしまうかについて書いている。また彼はこのほか、これからのあるべき電子情報の世界を求めるエッセイを同じ *The New York review of books* に多数寄稿している。

もうひとりの研究者グラフトンのほうは、*Codex in crisis*[21]（2008）という著書で冊子の本がなくなることの危険について述べている。20 世紀半ばから始まった図書館資料の大規模なマイクロ化は、一方で新聞などの原資料の大量廃棄をもたらした。そして、次の複製手段としてディジタル化が始まり、利用者もディジタル情報を好むようになってきている。しかし、Google Books は時折ページ（特に折り畳み図版など）のスキャンもれもあるし、OCR での文字の読み取りも不正確である。状態が悪い本がディジタル化されていることも見受けられるし、書誌情報が不十分で本の同定に苦労するものもある。特に多巻物資料では必要な巻になかなかたどりつけない。Google 以外でも多数の本がディジタル化されつつあるが、それを簡単に見つけられるようにはなっていない。歴史家にとって、資料を読むとはテクストが画像で読めればよいというわけではない。250 年前の手紙からただよう酢の臭い、それはコレラの流行時に殺菌のため振りかけられたもので、そこから当時の様子を跡付けることができる。書物史家は、斥候兵が足跡をたどるようなもので、製本の状態から旧蔵者の社会階層を推量り、余白の書き込みから旧蔵者の大きな発見を見出すこともできるのである。しかし、古い本のディジタル画像はマイクロフィルムからされたものが多く、不鮮明であるし、製本の状態などは全くわからないのだ。

一方、電子ジャーナルやウェブ・サイトのような最初からディジタル技術で作られた情報については、アクセスする人の偏り、記事の断片化、広告の洪水など負の面が語られ、図書館も明るく騒々しくなりすぎていることへの違和感も述べられている。

図書館の未来は

最後に、こうした未来の本と関係する図書館の未来像について触れておこう。先に紹介した小説「本の終焉」の著者 O. ユザンヌは 1901 年に「未来の図書館」という文章も書いている[22]。ユザンヌは、我々も既にみたメルシエの『2440 年』から議論を始める。つまらない本をすべて焼いてしまうことが本当に行なわれるなど考えられることだろうかと。確かに時代により嗜好は変わり、現世代が過去のものを嘲笑するように、現世代のものは未来には嘲笑されるだろう。今日傑作であると思われているものも、その重要性はいつかなくなり、永続性というものはないだろう。しかし、人間の知の限界を早々と示す手助けになるような思い上がりはつつしむべきであるという。

ユザンヌは未来の印刷技術を予想し、視覚的なものにあふれる技術の到来を予想した。そうした新しい技術で本が作られる時代には、メルシエのように図書館には正しい判断で選ばれた少数の本しかないかもしれない。小説はなく、少数の詩と歴史書がある一方、多数の書誌と辞書類、参考図書類にあふれるようになる。愛書家は本を多く所蔵するのではなく、Polybiblon Club に所属して、そこで珍しい本を読むようになるだろう。この 20 世紀初頭のユザンヌの想像には、確かに消費社会や情報社会への萌芽がみられ、今や電子図書館が喧伝され、資料のディジタル化が進むようになった。

そうしたこれからの図書館について教科書風に書かれたものに George Stachokas の *After the books*（2014）[23]がある。スタイナーの講演と同じタイトルであるが、主張は

まるで違う。この本の著者は図書館実務の経験者であり、現在進行している図書館の変化を主導する立場にあるので、紙の本の後をどうするかについて非常に具体的に書かれている。図書館員向けの本であるから、その主張は、物理的存在である資料の管理業務から、広く社会に情報・メターデータを深く理解してもらう業務へと重点が変わるよう図書館員の意識改革を求めるものとなっている。また、図書館は現在進められている旧来の図書館資料と電子情報を扱うハイブリッドなものではなく、電子情報に特化した電子図書館を作った方がよいとも主張している。そして、まだディジタル化されていない情報は一刻も早くディジタル化すること、ディジタル情報の深い知識を持つ専門家を育てること、細かな専門知識を持つ人材を適切に配置することなどがこれからの電子図書館の課題となると述べている。図書館をヴァーチャルな存在とすることが目標になっているのだ。

こうした時代の変化の中で、図書館の社会的意味はどう変わるのかと思う人もいるであろう。昨 2015 年にまさに *The meaning of the library* という題の本[24]が刊行されている。これは 2009 年から 2013 年にかけて英国スコットランドのセント・アンドリューズ大学で行なわれた King James Library lectures を基にしたもので、図書館史、文学・映画で描かれた図書館、そして現在・未来における図書館の意味（存在意義）を論ずる 12 人の論文から成っているが、ここでは大学図書館共同レポジトリ HathiTrust の業務執行取締役であった John P. Wilkin の論文 ‘Meanings of the library today’ をみてみる。彼によれば図書館の意味の四本柱はキュレーション、研究・学習用務、出版活動、利用空間の提供であるという。その四本柱の相互関係は時代により変化してきた。現在、図書館予算や出版物の売上げなどの数字は減少する傾向にあるが、それへの対処で重要なのはネットワーク化された大規模なスケールの共同事業であり、それにより効率化された資金を出版活動へ振り向けることで、上記の四本柱は活性化するだろうというのである。確かに、大学図書館がこのように広く学術を発信することはとても良いことのように思われるだろう。しかし、スタイナーの考えでは、大学の発信するものは重箱の隅をつつくものばかりになっており、かつての深い教養がなくなっているという。今日のように情報が非常に多くなると、情報の断片だけを追いかけ、それとつながっている深い意味をとり逃がしている研究が増えているのではないだろうか。コンピュータの能力がさらに上がると、個人の能力は逆に低下するのではないかとの不安も出てくる[25]。

シンギュラリティーのこと

アメリカの発明家 R. カーツワイル（1948-　）[26]は *The singularity is near* [27]（2005）で 2045 年にはコンピュータが人間の知性を越え、人間に不死の可能性が出てくるという楽天的な（別の面からみると悲観的な）ユートピアを描き出した。この人口知能の世界については、M. シャナハンというロボット工学者が自著 *The technological singularity*[28]（2015）で、超知性実現の可能性からその社会へのインパクトまでを説明し、天国が待っているか、地獄が待っているかわからないとしている。文章を書くという行為を、人でなくコンピュータが行なうことは人間を不死にすることより容易に思われ、スタイナーの「書物の終焉」の予感が実現するということであろう。コンピュータの作った俳句に感動できるだろうか、それとも、俳句がなくなるのか。あるいは、人口知能を身にまとった人間と心からの会話ができるだろうか。もしできるというなら、その時には人間の感受性が大きく変わっているだろうし、その先に人類の終焉が待っているのかもしれない。

[1] Steiner, George『むずかしさについて』[*On difficulty and other essays*] 加藤雅之他訳 , みすず書房, 2014, p.257-278.「書物の後には？」の原文 'After the Book?' の初出は雑誌 *Visible language* の v.6, issue 3（1972）p.197-210 で、この号には合わせて、このスタイナーの講演を聞いた 4 人の出版関係者が寄せた講演の感想・反論も掲載されている。また、『批評の解剖』で有名な文芸批評家ノースロップ・フライ（1912-1991）は、次の回の Ferguson Seminar in Publishing で 'The Renaissance of Books' という講演を行なったが、これはスタイナーの講演を受けた内容のものであった。この文章も同じ雑誌の v.8, issue 3（1974）p.225-240 に掲載されており、この雑誌はネットで読むことができる。

[2] 邦訳は「脱教養時代の文化」という題で、Steiner, George『脱領域の知性』[*Extraterritorial*] 由良君美他訳 , 河出書房新社 , 1972, p.225-247. に収載。

[3] 邦訳は Steiner, George『青髭の城にて』[*In bluebeard' s castle*] 桂田重利訳 , みすず書房 , 1973, 167p.

[4] この講演は Steiner, George. *No passion spent*. Oxford, Oxford University Press, 1996 に収録され、邦訳は以下の通り。Steiner, George『言葉への情熱』[*No passion spent*] 伊藤誓訳 , 法政大学出版局 , 2000, p.1-24.

[5]「書物の後には？」は「脱教養時代の文化」や『青髭の城にて』、「普通でない読書」と論旨が重複しているので、以下の略述はこれらの内容を混ぜている。

[6] モンテスキューは *Pensées* と呼ばれる草稿の中で「古代（ギリシア・ローマ）での有名な哲学者や学者がなしとげた膨大な業績、あるいは、彼らの話を聞くために全国から人が押し寄せたことを知ると、我々はもはや彼らと同じ学問愛を持ってはいないと言わざるを得ない。当時は書物も図書館も稀であったから、生ける書物である人物の知識が一番評価された。古代人は歴史を知っていたが、自分は歴史を所蔵するのみである。事態がこうなった原因は印刷術であり、昔は人物が評価されたが、今は書物が評価される。」（草稿番号 899）と書いている。スタイナーは、この認識が書物の黄金時代の始まりとなったとみている。

[7] マラルメは 1885 年 11 月 16 日付のヴェルレーヌ宛書簡で「…物書きなら誰でも、天才でさえ、（究極的な）ただ 1 冊の書物を書こうとしてきた」と書き、宇宙の秘密を解き明かす、至高の書物を創ろうとした。スタイナーは、これを書物の黄金時代の頂点とみている。マラルメと書物のかかわりについては清水徹『マラルメの＜書物＞』水声社 , 2011, 174p. などがある。

[8] 1996 年に刊行された *No passion spent* の序文には読書を抑圧するものの一つとして電子技術への言及がある。昨今の電子技術の進展により、我々の知っている書物は、特殊なものとして生き残りはするが、印刷術発明後の彩色写本のような存在になるだろう。大衆文化が進み、プライヴァシーが浸食され、消費文化は沈黙に圧力をかけ、学校教育は記憶を重視しなくなる。このようにして書物と読書行為は衰退するだろう、などと書かれている。スタイナーは当時、まだ万年筆で文章を書いていたそうである。

[9] Cyrano de Bergerac『日月両世界旅行記』[*Les états et empires de la lune. les états et empires du soleil*] 赤木昭三訳 , 岩波書店 , 2005, p.154-155.

[10] Mercier, Louis-Sebastian「紀元二四四〇年：またとない夢」[*L' an deux mille quatre cent quarante, rêve s' il en fut jamais*]『啓蒙のユートピア III』原宏訳 , 法政大学出版局 , 1997, p.1-273.

[11] フランス革命期の 1793 年 11 月、書誌局長 Urbain Domergue（1745-1810）は国民公会に「書誌に関する報告」を提出したが、その中でドメルグは、没収した書籍の書誌を作成する前に、学者からなる審査会が売却するものを決め、革命に有害なものを取り除くとした。この報告書 'Rapport fait au Comité d' instruction publique sur la bibliographie générale' は J. Guillaume 編の *Procès-verbaux du Comité d' instruction publique*, t.2（1894）p.795-799. に収録されており、Gallica で閲覧できる。

[12] 原文はフランス語で、英訳（訳者不明）が先に雑誌に掲載され、フランス語本文は翌 1895 年に刊行されたユザンヌの小説集 *Contes pour les bibliophiles* に収録されている。この短編集は画家 Albert Robida（1848-1926）による挿絵が多く入れられ、同じ絵が *Scribner's magazine* 掲載の英訳にも使われていたので、刊行を準備していた『愛書家のためのコント』中の 1 編を先に刊行したのであろう。

[13] ケルヴィン卿はダーウィンが地球の年齢を 3 億年程度と見積もっていたことに対し、自ら計算して、もっと小さな数字（概数で）を出して、ダーウィンを攻撃した。彼は太陽の年齢もほぼ地球と同じとみなし、太陽のエネルギー源を重力エネルギーとして計算したので、小さな数字となったし、太陽の寿命も後 2000 万年を超えることはないという結論を出している。当時は、核融合のことなど思いも及ばぬことであった。

[14] 使用したのは以下の英訳である。Ferrarotti, Franco. *The end of conversation; the impact of mass media on modern society*. [*La storia e el quotidiano*] New York, Green Wood Press, 1988, p.1-43.

[15] 使用したのは以下の仏訳である。Ferrarotti, Franco. *Des livres pour vivre* [*Legge, leggersi*] Trad. par E. Lambion et D. Vander Gucht, Bruxelles, La Lettre volée, 1988, 56p.

[16] Ferrarotti, Franco. *Libri, lettori, società*. Napoli, Liguori Editori, 1998, 108p.

[17] 邦訳は Darnton, Robert『猫の大虐殺』[*The great cat massacre and other episodes in French cultural history*] 海保真夫 , 鷲見洋一訳 , 岩波書店 , 1986, 382p.

[18] 邦訳は Grafton, Anthony『テクストの擁護者たち：近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』[*Defender of text*] ヒロ・ヒライ監訳 , 福西亮輔訳 , 勁草書房 , 2015, 400p.

[19] Gutenberg-e は Columbia University Press と American Historical Association の共同事業で、インターネットで読める。

[20] このエッセイはもともと 2008 年 3 月 13 日に‘The research library in the digital age’と題して行なわれた S. T. Lee lecture in the humanities での講演であり、*Bulletin of the American Academy of Arts and Sciences*, v.61（Spring, 2008）に掲載されたものであるが、読者層の広い *The New York review of books*（June 12, 2008）にタイトルを‘The library in the new age’と変えて転載された。さらに、他のエッセイと合わせて *The case for books ; past, present and future*. New York, Public Affairs, 2009. に収録されたとき、表題が‘The information landscape’と変更されている。

[21] この本は、雑誌 *New Yorker*（Nov. 5, 2007）に寄稿した‘Future reading : digitization and its discontents’というエッセイを増補したもので、ニューヨークの The Crumpled Press から刊行された。また、Grafton, Anthony. *Worlds made by words: scholarship and community in the modern west*. Cambridge, Harvard University Press, 2009, p.288-329. に再録されている。

[22] Uzanne, Octave. “Les bibliothèques de l’avenir,” *Revue franco-allemande*. Jahrg.3, 1901.2, p.87-93.

[23] Uzanne, Octave. “Les bibliothèques de l’avenir,” Revue franco-allemande. Jahrg 3, 1901.2, p.87-93.

[24] Crawford, Alice ed. *The Meaning of the Library : A Cultural History*. Princeton, Princeton University Press, 2015, 300p.

[25] 例えば Carr, Nicholas『ネット・バカ：インターネットがわたしたちの脳にしていること』[*The shallows*] 篠原直子訳 , 青土社 , 2010, 359p.

[26] カーツワイルは 1992 年に *Library journal* 誌に‘The end of books’という論文を投稿している。彼によれば、技術は前兆＞発明＞発達＞完成＞永続性の誤認＞旧式化＞古代化という段階

を経るという。最後の古代化の段階の例として馬車、ハープシコード、手動タイプなどがあげられ、紙の本もそろそろこの段階に入るだろうという。

[27] 邦訳は Kurzweil, Ray『ポスト・ヒューマン誕生：コンピュータが人類の知性を越えるとき』[*The singularity is near*] 井上健監訳 , 小野木明恵 [他] 訳 , NHK 出版 , 2007, 596p.

[28] 邦訳は Shanahan, Murray『シンギュラリティ：人口知能から超知能へ』[*The technological singularity*] ドミニク・チェン監訳 , NTT 出版 , 2016, 264p.